囲碁将棋部　原田 健史 選手（全国総合文化祭出場）

全国の舞台で貴重な初勝利をあげました。

補習中のみんなに後髪をひかれながらも、囲碁将棋部初の全国大会へ参加して参りました。初日は移動日でしたが、長崎駅に着く前から制服姿がちらほら。長崎駅へ着き、大きな歓迎の垂れ幕とそろいのＴシャツを着た高校生の案内スタッフが多く見られました。この歓迎ムードに、いよいよ長崎に来たなという意識を強く持ち、５時間の電車移動の疲れも吹き飛びます。

翌朝、いつもより早い食事を取り、輸送バスに揺られて１時間で、会場となる長崎県時津町コミュニティセンターに到着しました。選手全員にＩＤタグが配られましたが、我が顧問には準備し忘れたということで「田淵」と丁寧ながらも汚い字でタグに手書きしました。

会場へ入ると、既に対局準備・開会準備はできていました。並んだ優勝カップを見て、感慨深げにポツリと「あれを持って帰るのか・・・。」とつぶやいたりしなかったのですが、次第に緊張の度合いも高まってきました。総勢で４２５人の北海道から沖縄までの全国から選ばれた選手達は誰もが強そうで、緊張と気迫がみなぎっています。もちろん我が原田選手も負けてはいません。

開会式では日本カ将棋連盟や日本文化連盟将棋部門の方や長崎県や町の方から将棋のすばらしさや対戦方式を聞きました。対戦方式は予選リーグがスイス方式です。最初はランダムに対戦を行い、２回戦は勝者が勝者同士、敗者は敗者同士で行い、３回戦は２勝の者同士、１勝１敗の者同士、２敗同士・・・と同じ勝ち数の者同士が対戦していきます。そして決勝トーナメントの出場選手が絞られるまで対戦を続けます。この日の男子個人戦出場者は９８名、理論上は決勝トーナメント３２名を選ぶためには４回戦まで行えば良いことになります。予選の組合せは同じ県同士、既に対戦したことがある者同士を避けて、機械的に対戦します。決勝トーナメントでは予選リーグの成績に基づいて組合せが決まります。

そしていよいよ第１回戦です。相手は奈良県の選手ですが、なんと１年生です。１年と聞くと皆さんはどう思いますか。私は思わず顔が曇ります。将棋では年齢は関係ありません。むしろ、何のシードもない１年生が、上級生を蹴散らして県で優勝か準優勝したということは、「怪物出現」である可能性が大なのです。

真上のギャリーから見ていると、お互いに序盤こそ調子が出ませんでしたが、中盤から長考が多くなり、どちらに勝敗が傾いてもおかしくないせめぎ合いが続きます。終盤、これは勝てるかもと思っていた矢先、妙手が相手に出たのです。原田選手は気付いてなかったのか、気付いていたが手の打ちようがなかったのかは聞きませんでしたが、これで勝負は決まりました。原田選手は席を立ち際に「勝てとった」とつぶやき、後悔とも手応えを感じたとも思える顔つきでギャラリーにやってきました。

２回戦目は徳島県の２年生の選手です。互いにじっくりと自陣を囲む展開となりました。こういった展開にありがちな、一つのきっかけで勝負が速くなる展開でした。一気に原田選手有利の盤面となり、最後にもたつく場面もありましたが見事勝利を収めました。記録的な全国初勝利です。このころの会場は耐え難いほどの熱気に包まれており、見ている方も大変でした。女子生徒の中には緊張と暑さで倒れる選手も出て来ます。対照的に原田選手は表情を変えず、たんたんと感想戦を進めていました。

３回戦目は愛知県の３年生でした。大きく自陣を広げて仕掛けてきましたが、原田選手は冷静に捌きました。広がりすぎた相手に対して、まとまった布陣を保ち、盤面は次第に原田選手有利になっていきました。これで行けると思ったとき、対戦者が「ふー」と大きく息を吐きました。飛車が取られていました。対戦者は「勝った」と思ったでしょう。しかし、あっと思う間もなく原田選手は４九銀と飛車を取り返しに行きます。原田選手の表情には全く動揺がなく見事でした。飛車を取り戻しましたが、駒損もあり、長い対戦の末に敗れてしまいました。

４回戦目は長崎県の優勝者との対戦です。序盤に勝負を掛けた原田選手は早い段階で相手につけいられてしまいました。序盤から、いきなり終盤に進んだ局面を見ると、将棋の力では負けていないのに・・・と強く思いましたが、結局連敗となり、決勝トーナメントへの進出はなりませんでした。

全国に来るまでは全く歯が立たないだろうと思っていた原田選手の力は、全国の選手に互したものでした。これも別の意味で井の中の蛙だったのかもしれません。お隣金光学園の羽仁選手は全国３位に入賞し、お互いの検討をたたえました。「自分は勝つためだけに将棋をやってきたのではないし、今回も楽しめたら良いと思って、大事な時期だが出場を決めました。全国の場に立ち、様々な対戦や雰囲気を楽しめて満足しています。私は県内予選で羽仁君に勝てなかったことで自分自身を過小評価していました。自分はこれからも頑張るので、後輩達には自分以上の成果を出して欲しいです。」と原田選手はコメントしています。